

明治三十五年の医療過誤

ちょっと調べることがあって「新聞が語る明治史」（昭和五十一年・原書房刊）という本をめぐっていたら気になる切り抜きが目についた。

「 大学病院大失態

手拭大のガーゼ腹中に遺失

医学上空前の裁判問題」 とある。

明治三十五年十二月二十五日の「日本新聞」で、丁度百年前のことである。ざっと見たところこれ以前には、今日で言うところの医療過誤を思わせる新聞記事は見当たらない。つまり新聞種になった本邦最初の大学病院の大失態ということである。やや長文だが興味深いので引用する。

「 前の磐城炭鉱会社建築主任技師山田芳三氏の妻京子は、本年四月大学病院に入院し卵巣水腫の手術を受けしが、退院後半年間半死半生の難病に罹り、東京、磐城、名古屋の医師十数名の診察治療を受けしも病歴判然せず、先頃に至り不思議にも長一尺三寸五分、巾九寸五分なるガーゼの布片が腹内より直腸を破りて出でしより今は殆ど健全の身となり、先の難病は大学病院手術の際ガーゼを腹内に縫込みたるに基因せしを確かめ得たり。斯る医療上の一大過失は將に主任医の不注意にして、是が責任を明にし、併せて賠償を得らるべきものなるや否やは、後來斯る手術を受くる病患者の爲め此問題を解決し置かんとし、京子は法学士弁護士岡崎正也氏に依頼し、主任医木下医学博士に対し、昨日を以つて東京地方裁判所に損害賠償の訴訟を提起したるが、本邦に在つては医療上に関する空前の訴訟なれば、事件の進行すると共に医学者界、法学者界の一大問題たるべしといふ。」

本邦空前の訴訟提起というのだから、患者が畏れ多くも主任医である医学博士様を訴え

た最初の事例であろうか。腹中のガーゼという誰の目にも証拠が歴然としているこの事例では、医者 of 過失の有無は争う余地は無いと思われるし、従つて被害者が賠償を得られるか否かが大問題になるだろうというのは、現在の時点から見るとまことに奇妙である。現在から見れば法律論以前の常識の範囲の問題を「医学者界、法学者界」が特に重大視したのは、察するにこの提訴を公序良俗への挑戦と見たに違いない。国家権力の中枢を担うべき帝国大学卒の学士様が庶民からその過失を咎められることを、権威空洞化の予兆と見てそれに怯えたのであろう。当時の医者と患者の社会的な力関係からして、というよりは学士様に与えられる権威の不当な大きさからして、それまでは何事によらず患者は泣き寝入りが当然で訴訟など起こせる筈も無かつたと想像出来る。

この事例の判決がどうであつたのかは知らないが、まさか原告敗訴ではなかつたと思いたい。それが人の上に人を作らぬ文明開化というものだろうから。

近年患者のことを猫撫で声で「患者様」と称して持ち上げるフリをするのが流行っているけれど、お互い気持ちが悪いだけで、それで彼 my 関係が変わるわけではないことは誰でも知っている。人の名前に「様」を付けるのは、時と場合によつては丁寧の上にバカがつくことになるかもしれないにしても、間違つてはいない。まっとうな日本語である。しかし、背後に特定の人の顔を想定していない普通名詞である「患者」に、「様」を付ければ、それだけで患者の立場を尊重したことになるだろうというのは、ことばに鈍感な人の錯覚に過ぎない。

しかし、今はこの据わりの悪いヘンな日本語も百年後には案外定着しているかもしれない。幫間や茶坊主とあまり変わらなかつた江戸時代の医者 that 急に持ち上げられて「お医者様」になるのは、帝大卒の学士を権力構造の中枢に据える必要からの、政略的な作為だつたと私は考へている。初めは異様な感じがしたに違いない「お医者様」というヘンな言葉が、今、手を振つて通用するのも文明開化以後の明治の社会に瀰漫する官尊民卑の風潮があつたからこそである。もしも百年後「患者様」が当たり前 of 使い方になつていふとすれば、この間に医者と患者の立場が逆転しているか、あるいは少なくとも互いに水平の位置関係になつていなければならぬという気がする。多分そんなことはありえないだろう。そして実態の無い、違和感を伴つ言葉がそんなに長続きする筈がないから、「患者様」はいずれ消えるべきことばであらう。

この頃医者のミスの多いこと、あまり頻繁なので少々のことでは驚かなくなつた。それでも時に度肝を抜くような凄まじいやつが報道されて仰天させられる。最近では腹腔鏡を口クに扱つたこと of 無い医者が前立腺全摘を試みて、膀胱下方の静脈叢からの大出血を処理出来ずに患者を死なせてしまつたのが記憶に新しい。これなどは江戸時代の武士の試し切りみたいなもので、単純なミスではなくて紛れもなく殺人である。おまけに被害者に手術料を払わせたとしたら、上に強盗がつく。末世というしかない。こんな非道な「強盗殺

人」が医療過誤の名で横行するのに比べれば、腹中にガーゼを忘れる程度の過失は兎戯に類する。

人の嘗為としての過失を統計的にはゼロにすることは出来ない。開腹例数に対して一定の割合でガーゼは必ず遺される。ミスの発生頻度は百年前も今もあまり変わらず、そして多分、百年後も医者と同じ過ちを繰り返しているに違いないと私は思う。しかし、このような単純ミスではなく医者が患者を食いものにする凶悪な犯罪が近頃は増えているような気がするの、マスコミの過大報道のせいだけではなく、国家試験合格者の数が増え、医者の実数が増えた分、医者の顔をした殺し屋も増えたということか。社会が内包する殺し屋の割合も恒数みたいなものかもしれない。